



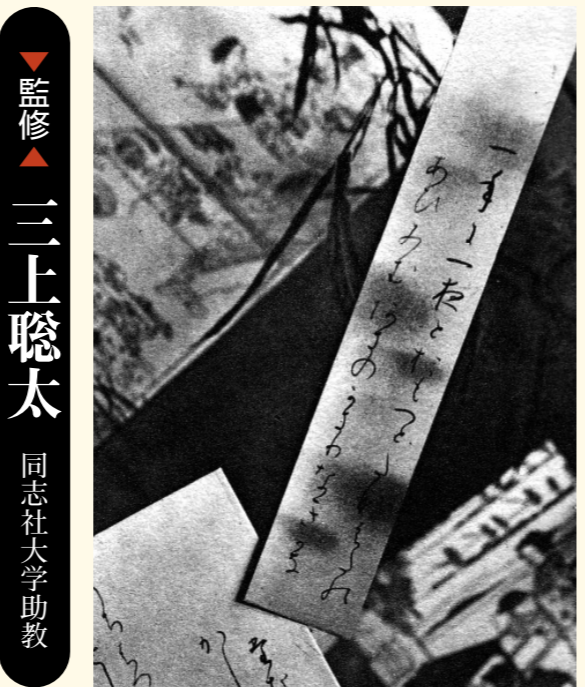
# 時世粧

じせいそう  
時世粧

全2巻

伝統から流行へ。——京都の老舗をスポンサーとして刊行したPR誌／文芸誌を完全復刻！

ゆまに書房



監修 ▲三上聡太 同志社大学助教

## 時世粧 (じせいそう) 全2巻

プリント版= 2026年6月刊行予定  
電子書籍版= 2026年7月刊行予定

【監修】三上聡太 同志社大学助教 ●定価：本体 58,000 円+税 ISBN978-4-8433-7232-6 C1395 B5判上製／総 420 頁 (予) /カバー装 (電子書籍=同時 1 アクセス:本体 63,800 円+税/同時 3 アクセス:本体 127,600 円+税) ★電子書籍版は KinoDen / Maruzen eBook Library のサービスでご購入になれます。

### 全巻構成

- 1● 時世粧 第一巻第一号～第一巻第四号 / 1934年(昭和9)11月～1935年(昭和10)10月  
定価：本体 28,000 円+税 ISBN978-4-8433-7233-3 / 電子書籍版=同時 1 アクセス：本体 30,800 円+税・同時 3 アクセス：本体 61,600 円+税
- 2● 時世粧 第一巻第五号～第一巻第八号 / 1936年(昭和11)5月～1938年(昭和13)2月  
定価：本体 30,000 円+税 ISBN978-4-8433-7234-0 / 電子書籍版=同時 1 アクセス：本体 33,000 円+税・同時 3 アクセス：本体 66,000 円+税

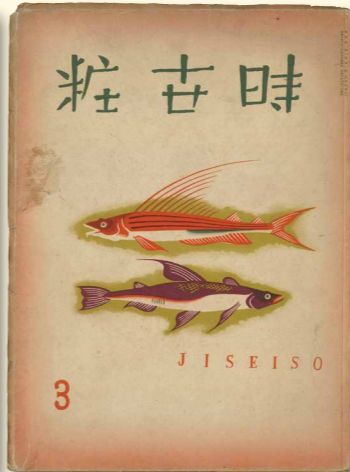
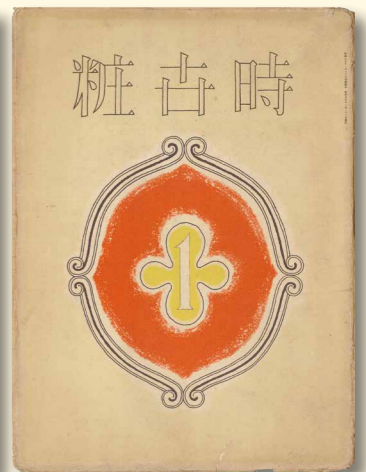


### 本書の特色

- 「日本一贅沢なPR誌」(堀口大学)
- 鳩居堂、一保堂、春芳堂、ゑり善、香取屋、寺内貴金属店など京都の老舗十九店が同人として参加。
- 佐藤春夫、室生犀星、萩原朔太郎、三好達治、与謝野晶子、宇野浩二、井伏鱒二ら京都ゆかりの文学者が寄稿。
- 小林祐史、浅沼守らK・P・S(キョウト・ホト・ソサエテ)の写真家が広告を撮影。
- 堂本印象、清水六兵衛ら京都ゆかりの画家・陶芸家の作品も紹介。

ゆまに書房 〒101-0047 東京都千代田区内神田 2-7-6 TEL.03(5296)0491 FAX.03(5296)0493 <https://www.yumani.co.jp>

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491 / Fax.03(5296)0493 年 月 日		取 扱 店
<b>時世粧 (じせいそう) 全2巻</b> 揃定価：本体 58,000 円+税 ISBN978-4-8433-7232-6 C1395		
ご注文書	お名前	TEL ( )
	ご住所	



# 刊行にあたって

同志社大学助教 三上聡太

「時世粧（じせいそう）」はもともと白居易の言葉で、「流行」という意味がある。パリでさまざまなモード誌に触れていた堀口大学が、そのスタイルを導入し、京都で同じようなものをつくらうと刊行したのがこの雑誌である。

見どころは何と言っても「PR誌と文芸誌の両者を兼ねた編集」（紅野敏郎）にある。目次には京都の老舗と京都ゆかりの文学者の名前がずらりと並ぶ。いかに堀口大学でも京都にこれほどの人脈をもっていたとは考えにくく、友人の初瀬川松太郎（八代目初瀬川柳庵）らの協力があつたと思われる。また直前に京都の老舗をあつめた「洛趣会」、専門店をあつめた「京都専門大店会」が発足したことも後押しとなったに違いない。

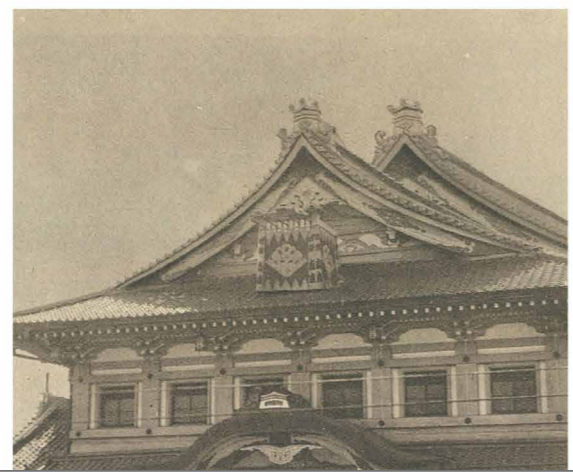
今回の復刻では、一九三四（昭和九）年十一月から一九三八（昭和十三）年二月までに刊行された全八号を復刻する。使用した原本は京都の老舗に大切に保管されていたものであり、当時のモダンかつ瀟洒な雰囲気そのまま再現することができた。メディア研究や文学研究はもちろん、広告研究にも幅広く活用されたい。

## ●時世粧同人会●

鳩居堂（熊谷直清）、香取屋（橋本信次郎）、山本ショール（山本源三郎）、鎰屋（白波瀬季一）、初瀬川（初瀬川松太郎）、揚光堂（三上正三郎）、マルサン（木村安次郎）、糸り善（亀井辰次郎）、寺内貴金属店（寺内季之助）、一保堂（渡辺雅之助）、志ま三（山本勝之助）、小野春宝飾店（小野正之助）、アダチ鞆靴店（安達真三）、岩田蒲団店（岩田市兵衛）、石川雑貨店（酒井定右衛門）、春芳堂（伏原佳一郎）、杉村屋モスリン店（稲本治三郎）、蝶屋洋服店（大橋理祐）、めいせんや（山本文助）。

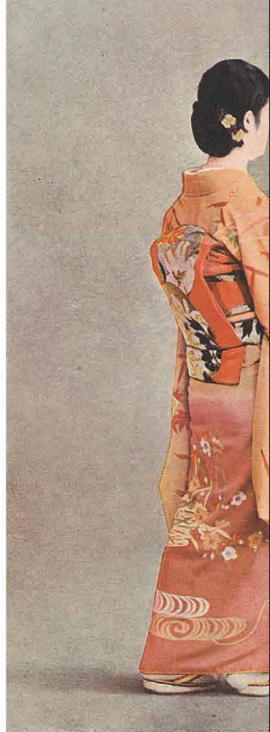


## 本文見本 80%に縮小



### 流行に就て

流行がたゞ宣傳のみに止つて終ふ時は、これまで決して少くはあつたであらう。だが、流行界を指導するやうな力のあるものゝ出現は極めて稀であります。これは服飾界の商標から例へば、改訂にも等しい存続を流行に宣傳され、一般にこれに賛同して、愛用されてきたものが、唯一の原因であると思はれます。そこで今秋から「時世粧」の「時世」は、是非実行して頂きたいお願ひは、宣傳におき、御自身の趣味と顧客を尺度に、一番適當なものを、お選び願ふ事です。 京都 しま三 あるじ白



# 秋の京都の思い出 宇野浩二

「時世粧」の第三號のグラフを、一頁からゆつくり繰つてゆくと、三頁に次ぎのやうな詩を見出した。

實玉の露のしづくを  
いはいえ 奥さん  
鎰屋のさき舟は  
あなたのせうへ  
美味を運ぶ

堀口大学

この詩に寫眞が附いてゐる。古い見覚えのある鎰屋の窓際に、切子硝子の菓子皿に多分この詩にある「さき舟」が盛り込まれてゐる。それと並んで多分常夏の鉢植が置いてある。若しこれが私の見違ひでなければ、私は次ぎのやうな歌を思ひ出す。塵をたにすまじと思ふ咲きしより妹とわがわるとこなつの花

私が「古い見覚えのある」と書いたのは、私がこの京都の鎰屋の存在を初めて知つた今から二十三年前の秋、この寺町通二條角にある鎰屋に、黒

谷の友人の寓居から友人と毎晩ほど通つて、菓子を食べ紅茶を飲みながら、鎰屋の窓から寺町通を眺めながら、青春と詩を飽きず語つたことがあるからである。

友人といふのは當時畫學書生でインクラインの傍にある洋畫研究所に通つてゐた。彼の寓居といふのは黒谷の或る寺の離家であつた。北に眞如堂南に南禅寺、西に平安神宮などがあつた。寺々の鐘の中では智恵院の鐘が最も長く餘韻を残した。當時、私は二十三歳の懶者の文學書生で、東京の學校を無断缺席して、京阪に出かけた時、この友人の畫學書生の寓居に一週間ほど居候をしたのであつた。朝起きると殆ど毎朝ほど寺の庭には霧が立ちこめてゐた。この友人と夕方になると黒谷から聖護院の前を通り丸太橋を渡つて毎晩ほど寺町通の鎰屋に通つたものであつた。——それを思ひ出したのである。

次ぎに、鎰屋に行つたのは、これも十五六年前になる。これは以前一度書いたことがあるが、直木三十五がまだ植村宋一であつた頃、直木三十五

【上】『時世粧』第一巻第一号 1934年(昭和9)11月より  
【下】『時世粧』第一巻第四号 1935年(昭和10)10月より